

令和元年度 鹿島市立明倫小学校 学校評価結果

資料

<p>1 学校教育目標</p> <p>「いい顔 いい声 いい動き」</p>	<p>2 本年度の重点目標</p> <p>①学級経営の充実 ②確かな学力の向上 ③豊かな心の育成 ④特別支援教育の充実 ⑤ふるさと大好き子の育成 ⑥家庭・地域との連携</p>
---------------------------------------	---

達成度 A:ほぼ達成できた
B:概ね達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
① 地域とともにある学校づくりと教職員の資質の向上							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校経営方針	学校教育目標及び本年度の重点目標の周知	教職員・児童・保護者に周知させ、認知度を80%以上にする。	○定期的な学校便りの発行・コミュニティ・スクール便りを発行する。 ○授業参観及び懇談会を充実させる。(年5回の参観、3回の懇談会) ○保護者との教育相談を今年度も実施し学校方針等を周知する。(11月実施) ○学校運営協議会での意見交換を改善に生かす。(年4回) ○PTA総会や新入児保護者説明会等で保護者に周知する。	A	学校の様々な取組を、各種お便りにより、随時発信した。保護者アンケートでも開かれた学校運営を行っていることに「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の回答が98%であった。HPの更新がサーバー移行もあり、順調に進まなかった。	・定期的に発行する学校便りに、学校HPの更新の情報も知らせ、HP閲覧者数を増やし、広く学校行事や日々の子どもたちの様子を伝えるようにする。
	○教職員の資質向上	学級経営に資する授業力向上	国語科・算数科を中心に「全員が参加できる授業」の授業研究を行う。	○全職員に対する計画的な研修計画の作成を行う。(業績能力評価システムの活用) ○全学年が全校授業研究会(国語科・算数科)を実施する。また、全員が研究授業を実施する。 ○講師を招へいし、実践研究を充実させる。 ○初任者及び若手教員の育成を全職員の協力のもと計画的に行う。	A	全学年が提案授業を実施し、授業力向上を図ることができた。93%の保護者が「教師は分かりやすい授業を工夫している」と回答している。	・来年度より教科をかえて研究に取り組む。その際に、全職員が同じ考えで授業に取り組めるよう推進の柱を決めて研究を行う。
	○危機管理体制	交通安全事故防止と不審者対応の校内組織づくり	より実践的な交通安全教室と避難訓練を実施し、職員研修の場とする。	○各学期初めや交通安全週間等に朝の交通指導を行い、交通安全指導の徹底を図る。 ○1学期に全学年、交通安全教室を導入して、交通事故防止の意識を高揚させ、交通事故防止に努める。 ○学校運営協議会と連携し、PTA、警察、地域見守り隊等の協力を得て地域で見守る体制づくりを行う。 ○年間3回の避難訓練(不審者、火災、地震)では、パターン化せず、児童の心に響く訓練を目指す。また、保護者に対しても外部講師による教育講演会等を開く。	A	PTA、地域、警察、消防署等と連携し、児童のための安心・安全活動を年間を通して実施した。避難訓練においても、昨年度の反省をもとに児童の心に響く訓練ができた。	・引き続き交通安全教室、避難訓練、自転車教室等を各機関と連携して実施し、安全・安心の推進に努める。 ・教育講演会が保護者の子ども達に応援になるように次年度も講演会のテーマ設定や日程の工夫を行なう。
	○開かれた学校づくり	外部評価の結果を公表し、改善に向けた取組を行う。	学校運営協議会による外部評価の改善・充実を図る。	○学校運営協議会での評価内容の検討・改善・工夫を行う。 ○保護者アンケート、児童・職員アンケートを実施し、その結果を公表し改善に努める。 ○学校便り、学年便り等を通して学校の様子や児童の活躍を知らせる。 ○ボランティアの方などとの交流会を実施し、児童集会等を利用して子ども見守り隊等への感謝の心を育てる。 ○学校運営協議会の組織を生かし、地域人材を活用した教育活動に積極的に取り組む。	A	地域のひとものことを活用し、各学年で体験活動等ができた。	・今後も学校運営協議会の組織を生かし、地域人材を活用した体験的教育活動に積極的に取り組む。 ・本年度の関係者評価に「評価の仕方が見えない」「評価方法の具体的な提示」についてお願いがあった。客観的に評価ができるよう観点を絞って評価計画を立てていきたい。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	元気いっぱいプロジェクトの実施により校務等の効率化の促進	3つの施策(教師の専門性を高める、子どもと向き合う時間の確保、働きやすい環境づくり)により業務を改善し、教職員の意識改革を図る。	○3つの施策の具体的な内容を全職員で共通理解を図る。 ○3つの施策から職員の業績評価の観点の見直しを図る。 ○学校運営協議会の組織を生かし、意見交換から改善に生かす。 ○英語教育専科指導教員やALT等の活用により、他の教科の教材研究の充実を図る。 ○職員からの意見を聞く場を設け、全職員の意識を高める。(毎学期) ○保護者からのアンケートにより子どもと向き合う時間の在り方の評価をし、改善を図る(1月末) ○定時退勤日には、前回までの達成状況を示しながら徹底に努める。	B	英語専科教員の配置により高学年の負担がかなり減った。今後の校時表の見直しにより、更に校務等の効率化を図り、子どもと向き合う時間の確保やゆとりを持った指導の在り方を探る必要がある。	・放課後の時間を確保することで業務改善を図るとともに、児童とゆとりをもって接することができるようにする。 ・来年度は、時間外業務の目標時数など、個々の数値目標を設定し、今年度以上に時間外削減に取り組む。

② 知・徳・体の教育の充実							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	・全国、佐賀県学力状況調査結果の分析と授業の改善	・学習状況調査結果を分析し、児童の伸ばしたい能力を把握し、ことばタイムや授業の改善を行う。	○学習状況調査結果の分析を全職員で行い、その分析結果を校内研究やTT少人数授業に生かす。 ○校内研究において、学力向上の土台である学習集団作りを効果的に進める。 ○少人数授業や習熟度別授業の実施を促進し、理解に時間のかかる児童の指導・支援の充実を期す。また、補習の時間を確保する。 ○鹿島市学力向上サポーター活用事業を有効に活用し、中高学年児童の学力の底上げに努める。 ○授業やサマースクールなどへ地域素材・人材活用を促進していく。	A	学習状況調査の結果を分析し、授業の改善へとつなげることができていた。また、基礎的な力を身につけさせるための手立てを有効的に活用することができた。	・文字に親しむ児童を育成するための朝読書の習慣化。 ・学習状況調査の分析に基づく、補充、補習の取組。 ・基本づくりのためのさんさんタイムの継続。 ・家庭学習に対する保護者への啓発。
	●心の教育	道徳教育の充実と教育相談体制の確立	支援を要する児童に対して学校全体で取り組む。	○道徳科の教科化に伴い、評価の在り方を検討する。 ○「ふれあい道徳」を授業参観日に行い、保護者の参加を仕組み、家庭教育の啓発もねらう。 ○教育相談担当職員を中心とした全職員での組織的な教育相談体制を充実させる。 ○一人一人を伸ばす教育推進事業を推進し、「来てよかった学校づくり」をめざしていく。 ○縦割り活動を様々な面において積極的に推進し、全児童の交流を促進する。	A	教育相談研修会を実施し児童理解と支援の方法について学ぶことができた。SCやSSWとの情報共有や対応策の相談も充実していた。年度末に児童の課題について協議したことを次年度活かす必要がある。	・SCによる講演会等を行うことでカウンセリングや心のケアについてのハードルを下げる活動を仕組む。 ・SSWを一層活用し、配慮が必要な児童や家庭を関係機関との連携を強化する。
	●いじめの問題への対応	いじめの撲滅、及び早期発見、適切な対応のための体制作り	自分の良さや友達の良さを実感できる児童の割合を80%にする。	○毎月いじめ等学校生活についてアンケートを実施する。 ○学級での人間関係や児童の学校生活への満足度を把握するためにQUTテストを実施し、学級経営に生かす。 ○いじめ対応に向け、学年や生徒指導部を中心に学校全体で対応できる体制を作る。 ○学校生活にうまく適応できない児童を支援するために、家庭への連絡や迎えなど学校生活支援員の有効活用を工夫する。 ○職員連絡会、職員会議等で児童に関する情報を共有する場を設け、全職員で児童を見守る体制を作る。	A	Q-Uテストや個人面談等を通して児童の実態把握に努め、早期発見と対応に心がけた。さらにアンケートを活用して、いじめの未然防止に努める必要がある。	・SCの相談日に、気になる子のカウンセリングを計画的に割り当て、心のケアに努める。 ・教育相談担当職員を中心として、児童理解に努める。 ・いじめの問題へ学校がどんな姿勢でどのようなことに取り組んでいるかお便りを発行し周知する。
	●健康・体づくり	・運動習慣の改善や定着化 ・望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	朝食をとって登校する児童の割合を85%以上にする。	○運動に親しむことで体力向上が図れるような魅力的な体育授業の実践をめざす。 ○佐賀県のスポーツチャレンジの取組や時季に合わせた「持久走」「なわとび」等の克服種目を取り入れ、自分の体づくりへの意欲を喚起する。 ○食育の推進に当たり、学校栄養職員・食育担当職員を中心に、授業や児童会活動での取組を充実させる。 ○食育講演会やアンケートを通して朝食をとることの大切さの理解と啓発を行う。	B	朝食をとって登校する児童(5年)が88%おり、どの学年もほぼ8割以上の児童が朝食をとって登校している。運動能力調査の結果を見ると、全学年で平均を下回っていた。体力の向上についての指導の工夫が必要である。	・体力向上につながる魅力的な授業の実践を一層目指す。 ・栄養教諭と連携した授業に積極的に取り組み、食育推進を一層進める。
	●志を高める教育	・地域と連携しながら、自らの夢や目標の達成に向けて努力する気持を高める教育活動の推進	郷土のひと・もの・ことに触れる体験活動を年間1回実施する。	○学校運営協議会と連携をとりながら、「ふるさと教育」を総合的な学習の時間や教科等で地域の人材活用を積極的に行う。 ○年間指導計画を改善し、地域力を活用した単元を計画する。 ○地域との連携推進者を設置し、きめ細やかな地域連携のコーディネートを行う。 ○奉仕活動や地域への参加など、地域のためになるような活動を行う。 ○県や市の事業等を積極的に活用し、ひと・もの・ことに触れる体験活動を計画的に活用する。	B	県や市の事業等を活用し、体験的な活動ができた。さらに地域に出向いて、触れる学習活動が必要である。	・地域の人材活用における情報収集を工夫し、地域と連携した体験活動を仕組む。

③ 指導方法改善と特別支援教育の充実							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●小学校低学年の学習環境の改善充実	基本的な生活習慣の定着	保護者アンケートで「おおむね良好」以上を90%以上にする。	<ul style="list-style-type: none"> ○生活習慣・学級習慣を定着させるため、指導計画を作成し見通しを持った指導を行う。 ○生活習慣、学習習慣を定着させるため保護者と連絡を取り合い、信頼関係を築いていく。 ○担任、級外及び支援員がチームになって複数の目で子どもを見守りながら個に応じた対応を強化する。 	B	低学年の基本的な生活習慣の定着状況を見ても、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の合計は、82%にとどまっていた。	<ul style="list-style-type: none"> ・個別に支援が必要な児童への対応を、担任だけでなく、級外、支援員がチームとなって個に応じた支援を強化していく。 ・低学年への取り組みを検証する学校評価項目を新設する。
	○指導方法改善(少人数・TT)	習熟度別・課題選択学習の充実	上学年の少人数指導においては、学期に1回習熟度別クラス編制を行い、補充・深化を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○学級内TT、少人数授業、習熟度別・課題別・コース別授業など多様な指導方法を工夫する。 ○デジタル教材やICT機器を活用した効果的な指導に取り組む。 ○諸学力調査及び知能検査の結果を参考にし、必要に応じて補充指導を充実させる。 ○家庭学習については宿題等の内容の工夫と家庭への連携を強化していく。 	A	少人数授業、学級内TTなど多様な指導に取り組むことができた。保護者への啓発不足のため、どのような指導の工夫が行われているのか十分理解されていない。	学力向上や指導方法改善に向けての校内取組を、1学期に1回をめぐりに通信で知らせる。
	○特別支援教育	支援を必要とする児童への支援体制の充実	校内支援委員会(ケース会議)により支援体制の充実が図られたとする教職員が85%以上にする。	<ul style="list-style-type: none"> ○学級担任など複数の職員によるチェックリストを活用し、支援の必要な児童の実態を把握(6月)し、校内支援委員会(7月、10月)開催する。 ○専門機関との連携や障害のある子どものための学校生活支援事業を活用し、個別の支援を充実させる。 ○個別の教育支援計画を作成し、児童に関わる職員が共通理解を行い、活用に関する研修会を開く。 ○夏季休業中などに、外部から講師を招聘して特別支援教育に関する研修会を開催し、教職員の指導力向上を図る。 ○特別支援学級の授業研究会を通して、全職員で理解を深める。 	A	特別支援学級の研究授業を通し、どのような学習が行われているのかを知ることができた。また、巡回相談で学級全体や発達障害の疑いのある児童への具体的なアドバイスを受け、指導に生かすことができた。	支援の必要な児童に対する早期発見早期支援を確立するためにも、級外・管理職を含めて全職員で見取り、必要に応じてケース会議を迅速に開いていきたい。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

・保護者アンケートからは、本校の教育活動に対しておおむね良好な評価を受けている。児童や保護者への対応についても評価が高く、何に対しても「ていねいに」「すばやく」対応する姿勢で教育活動に取り組んでいる成果が出ているものと思われる。TT授業や少人数指導の工夫が保護者に伝わっていない。どのように理解、啓発を求めていくかが今後の課題である。

・CS(学校運営協議会)の協力を得て、児童は安全に安心して地域で過ごすことができた。地域の人材を生かした活動として、今年度も面浮立の面づくりに取り組めた。しかし、地域の人材を生かした学習に学年や学級によって偏りも見られたため、年度当初に、担当者と学年担任と連携して計画を立てる必要がある。今後も、児童に地域の文化や良さを理解させるために、地域人材を有効に活用していきたい。

・気になる子、家庭環境の不安な子などに対して、職員は児童理解を深め、組織的に対応するように努力した。個別に対応が必要なケースが徐々に増えてきているので、SCやSSWも交えたケース会議を行い、鹿島市の福祉課や民生児童委員とも連携して対応していきたい。

・学校運営協議会員による外部評価では、具体的な説明を行わなかったためどのように評価した方がよいか戸惑われた方があった。協議会の中で目標、方策、成果について十分な説明をしていく必要がある。